

《光武 洋展～海の哀歌～》ギャラリートーク

日時 令和2年10月29日

場所 エイブル2階交流プラザ

講師 光武 洋さん



▲光武 洋さん

おはようございます。光武といたします。

私は昭和32年に鹿島高校に入学しました。当時は、校門である赤門を入れて、木造2階建て校舎の中央に玄関がありました。その真上に美術部室があり、そこへ入部願いを申し出たことが現在につながって、今の自分があるといえます。そこでのいろいろな先輩方や恩師との出会いがあって、今も絵を描いています。

その当時の部長は金子剛さん。現在、岩永京吉美術館で、京吉先生との二人展を開催されて

います。副部長は、真木さん。高校の美術教師から県教育庁で要職を歴任されました。次に、佐藤さん。大学卒業後は京都で教職に就きながら、日本画の研鑽を重ねられ、日展では審査員も務められました。この3人の方は、佐賀大学の特設美術科に進学され、のちに私もそこに進みましたので、いろいろと可愛がってもらいました。

それからもう一人、林さんがいらっしゃいます。東京藝術大学の美学学科に進学され、卒業後は県内の高校の美術教師を務められました。

このように先輩方は多士済々で、すばらしい方々と接することができた私は幸せ者です。

美術部に入部すると早速「石膏デッサンばせろ」と言われ、柳の枝を焼いた木炭を手渡され木炭用紙の前に座りました。中央には『ミロのヴィーナス』像が置いてありましたが、面食らってポケットとしていたように思います。今では、石膏デッサンのポイントを説明し、経過を写真で見せる本がたくさんありますが、当時は何もありませんでした。時々、岩永京吉先生が指導に来られて、先輩方のデッサンに手を加えられると、石膏像の存在感とその周囲の空間が見えてきたことに驚きました。

このようにして、私が美術の世界に足を踏み入れて60年になります。その間に強い刺激を受けた場面が二度ありました。

一つは、佐賀大学特設美術科の2年生の頃です。金子先輩に誘われて、他の2人の先輩と一緒に京都の市立美術館へ夜行列車で行きました。目的は『ピカソ展』をこの目で見ることでした。それまでピカソの作品は画集でしか見たことがありませんでした。それも、戦前・戦後の質の悪い印刷の画集でした。



▲ギャラリートーク中の光武さんと参加者

美術館で、直に作品を目にしたときは、ピカソがキャンパスに筆を運ぶ時の息遣いが聞こえてくるようでした。鋭い目つきで画面を睨みつけている姿も目に浮かびました。ピカソの自由さ、奔放さ、大胆さ、そして美的センスの良さ、それにモノを見る目の確かさに裏打ちされた造形のすばらしさに圧倒されました。

キュービズム（立体派）と呼ばれる作品がありますが、女性を描いた作品で顔の片方の目は正面から描いて、もう片方は横向きで描いたり、顔の横に鼻があったり、現実にはあり得ない造形で、まるで幼児が描いたのでは、と思わせるのですが、ちゃんと様になっているんです。絵になっているんですよ。

ヌード女性を描いているのを一見すると「あれー、なんか変だ。腕が脇腹から出ているように見える。」というの也有ります。しかし、よく見ると、決して人体の骨格をはずしていない。ちゃんと関節で繋がっているんです。デッサンではそれを味わい深い一本の線で描いています。消しゴムを使った跡もないんです。天才中の天才のすごさに圧倒されました。

それから7~8年後。東京で『現代アメリカ美術展』の会場に足を踏み入れたときに二度目のショックを受けました。第二次世界大戦まではフランスのパリが美術の中心でした。それが、戦後はアメリカの国策でニューヨークに移ります。アメリカは、どの分野でも世界一を目指したのです。

会場に入ると明るい色彩が溢れ、ドライな雰囲気であっけらかんとした作品群に圧倒されました。佐賀の田舎でしっとりとした情感溢れる作品を見慣れた私は唾然とするばかりでした。その頃から抽象絵画には中心がなくなったと思います。全体がパーッと広がっているというか。そこにアメリカの抽象絵画とヨーロッパの抽象絵画との大きな違いがあると思います。

中心がないから描くうちに広がって行って、必然的に大きなキャンパスが必要になり

ます。物理的に大きいだけではなくて、質的にもそれが必要になる。そうすると、大きさで空間の力で見る人を圧倒するんです。まさに、アメリカの物量作戦という感じでした。

だから、それらの作品を美術雑誌や小さな画集の写真で見てもつまらないんですよね。

東京で『現代アメリカ美術展』を見てから10年くらい経って、これでもかと言わんばかりの作品が北九州市立美術館にやってきました。会場に入ってビックリです。飛行機を造る素材のジュラルミンで造られた作品はとてつもない大きさでした。その作品を展示するために、美術館側は壁を壊して納めたということでした。ただ、こういう傾向は一時的なもので、今では美術雑誌でも目にしません。

さてここで、サム・フランシスという画家が言った言葉を披露したいと思います。

「ヨーロッパの絵画は、見る人を説得しようとして絵のほうからこっちへ出てくる。見る人に押し付けてくる。東洋の絵は、人が絵の中に吸い込まれる。」なかなか良い捉え方だと感じ、記憶の片隅に残っています。



▲干潮時の有明海（干潟）

話は変わりますが、私は有明海のすぐ近くで生まれ育ち、今に至っています。それこそが私のアイデンティティ（独自性）だと認識したのは40代中ごろだったと思います。自分が目にし、手で触れ、においを嗅ぎ、音を聞き、空気を吸い込んで、私の感性に響いてきたもの、それを描かないと自分の存在意義がない、と思ったわけです。

私が子どものころ、有明海の干潟は多くの生き物たちの命を育む豊かな世界でした。夏休みには竹製のテボ（籠）を腰のひもにさげて、パンツだけで干潟に入り、アゲマキ獲りに興じたものです。潟に二つ並んだ小さな穴は、アゲマキが潮水を吸い込み吐き出す水管を出し入れする穴です。その潟泥を10センチくらい払うとアゲマキは水を吹き出します。穴に沿って素早く指を差し込んで捕まえるのです。瞬間にアゲマキでテボがいっぱいになりました。

ある時は、ガン漬けガニ（塩漬けにするシオマネキというカニ）を獲りに行きました。これもエサは不要です。竹の釣り竿の釣り糸の先には釣り針をつけません。投げ縄のような輪を作り、カニが自分の近くに来るのを辛抱強く待ちます。そして、ハサミを持ち上げたところを輪っかに入れて捕獲するんですよ。非常に原始的な漁法ですが、熟練の技が必要だったですね。

足に濁泥を付けたまま堤防に上がって遊んでいると、夏の強い日差しで濁泥が乾燥して縮みます。そうすると、足の産毛が引っ張られてチクリチクリ痛痒くなってきて、堤防沿いの用水路に飛び込んでいました。

また、お盆過ぎの小潮のときは、釣り竿とテボだけ持って、ハゼ釣りに出かけました。干潟に着いたらまずエサの準備です。私や友達が『カッチャムツ』と呼んでいた、小型のムツゴロウを竹竿の先で叩いて獲って、それを小刀で輪切りにしてエサにしていました。そのエサで結構釣ることができました。本当に豊かな海で、豊かな干潟だったんです。



▲干潮時の有明海（干潟）



▲『海の哀歌』

それが、今は違っています。魚がいらないんです。釣れないんです。全く目にしなくなったのがアゲマキ、様々なカニ。減少したのがムツゴロウ、ハゼ。人間のさまざまな営みが、有明海を悲しい姿に変えたと思います。

私はこのことをテーマとして表現しようと、木造の廃船の竜骨や舟板を画面に貼り付けて作品化しました。いわゆるコラージュと呼ぶ技法です。塗料が剥げかけて下地がのぞいたり、舟虫にかじられた傷跡があったり、人の手では描けない廃船の表情に魅せられました。

「このコラージュは自分にしかできない」と自分でも手ごたえを感じ、コンクールに出品して高い評価もいただきました。その中の1点は、現在佐賀大学図書館に展示されています。

しかし、世の中そううまく事は運びません。その頃、岸边に廃棄されていた木造船は、撤去して焼却処分しなければ罰せられるという法律が施行されました。小型トラックに積んでも積みきれないほどあった素材は、やがて見当たらなくなりました。長年、潮水に浸り、潮風に晒されてきた木造船は姿を消してしまいました。



▲『海の哀歌』



▲展示風景

私にとっては絵具も筆も失したような状態で、作品化する方法を暗中模索する時間が長く流れ流れて、今の作品に至っています。

もし、木造船の舟板などがいつも手に入る環境であったなら、私の晩年はもっと違う展開になっていたのではと、夢見たりもしています。

私の思うところを全部伝えられたかどうかわかりませんが、聞いていただきありがとうございます。